

# 蒲生干潟で見られる野鳥とそれらを支える生態系⑥ (流木・朽木下の生物相について)

## 分解者



Fig.1 フラジムシ



Fig.3 コスナゴミムシダマシ



Fig.5 モトヨツコブエグリゴミムシダマシ



Fig.7 シロアリのなかま



Fig.2 オカダンゴムシ



Fig.4 モトヨツコブエグリゴミムシダマシ



Fig.6 キマワリ幼虫



Fig.8 ハマトビムシのなかま

## 捕食者



Fig.9 マルガタゴミムシのなかま



Fig.11 アリツカコオロギのなかま



Fig.10 ハマバハサミムシ



Fig.12 双翅目の幼虫



Fig.13 ヤガ科の幼虫



Fig.16 コモリグモ、トビロサシガメのなかま



Fig.14 オオメナガカメムシ



Fig.17 ナナホシテントウ



Fig.15 ヒメマダラナガカメムシ

朽木の下や朽木の中で越冬する昆虫など

調査日 2026年1月26日(月) 14:30~15:30, 2月2日(月) 13:45~15:15

蒲生干潟の陸上には大小さまざまな流木・朽木が多数点在している。それらは、多くの微小な生物にとって棲み処であり、餌そのものであり、一本の流木全体で小さな生態系を構築していると言える。冬季は寒さをしのぐためのシェルターとして、更に多くの生物が利用している。食物連鎖のトップである野鳥を支える蒲生干潟の生態系の一部について報告をする。流木を裏返してみると、流木の隙間や下で最も多く見られるのはフラジムシ (Fig. 1) やダンゴムシ (Fig. 2) のなかまである。流木下の砂の浅い位置に多く見られたのはスナゴミムシダマシのなかまで、前胸板の後端が外に尖っているような形状からコスナゴミムシダマシと考えられる (Fig. 3)。Fig. 4, 5はモトヨツコブエグリゴミムシダマシだと思われる。朽木の隙間に身を潜めやすいツヤのある円筒形のからだをしている。Fig. 6はキマワリ幼虫と同じくゴミムシダマシのなかまである。ゴミムシダマシのなかまは一般に菌類・腐植食性である。ある流木の裏側ではヤマトシロアリが見られた。シロアリは朽木を食べ巣を作るが、その朽木に空いた隙間が他の生物たちの棲み処ともなる。Fig. 8はハマトビムシのなかまと見られ、漂着した海藻などを食べる。Fig. 9~12は大小の捕食者たちである。Fig. 11はアリツカコオロギのなかまと見られ、アリの巣に住み着きアリを食べる好蟻性の生物である。Fig. 12は体調5mmほどで砂の中から見つかった。おそらくアブのなかまの幼虫と見られる。Fig. 13~16は朽木などを越冬するためのシェルターとして集まってきた昆虫などである。今回は観察していないが、トビムシ類やダニ類など更に微小な分解者たちも住んでいると考えられ、実に多様な生物相を確認することができた。(伊藤勝彦)